

音 楽 科

音 楽 科 部 稲 森 稚 明 藤 井 有 美
研究協力者 中 里 南 子

音
楽

1 育成を目指す資質・能力

聴き取ったことと感じ取ったことを結び付け、音や音楽と豊かに関わる資質・能力

2 育成を目指す資質・能力について

本校音楽科では「未来を拓く子ども」の育成のために、「聴き取ったことと感じ取ったことを結び付け、音や音楽と豊かに関わる資質・能力」を、育成を目指す資質・能力として捉えた。表現の際に音や音楽のイメージを表すために音楽を形づくっている要素を手がかりにして考えたり、鑑賞の際に音や音楽の生み出すよさや美しさを音楽を形づくっている要素を基に考えたりと、聴き取ったこと（音楽を形づくっている要素）と感じ取ったこと（曲想や音や音楽のよさや面白さ、美しさ等）を結び付けることで、音や音楽の捉えが広がっていく。そして、音や音楽の捉えが広がっていく中で、音や音楽が自分の生活や感情に働きかけてくることに気付き、生活や感情に合わせて、歌う・演奏する・つくる・聴く等の関わり方を自ら築き、音や音楽と豊かに関わるができるようになる。

この資質・能力が育成されることで、新しい音や音楽と出会った際に、自分なりの方法で表現したり、味わって聴いたりすることができるようになる。また、生活や社会の中にたくさんの音や音楽が存在することに気付き、それらを生活に取り入れることができるようになり、感性豊かに音や音楽を感じ取る心が育まれていく。

音楽的な見方・考え方を働かせながら学習を積み重ねることによって、音楽表現をする上で必要な「知識及び技能」を習得し、「思考力、判断力、表現力等」が育成され、「学びに向かう力、人間性等」が養われていく。そしてこれらの三つの柱と、音楽的な見方・考え方が相互に関係し合うことで、本校音楽科が育成を目指す資質・能力の育成につながる。

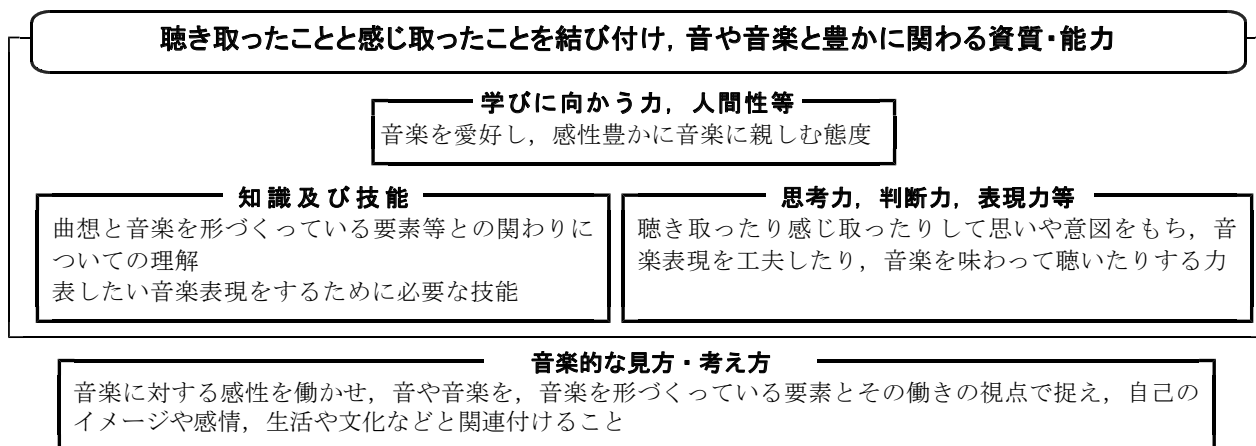


図1 本校音楽科が育成を目指す資質・能力の三つの柱と「見方・考え方」

3 研究の方向

これまでの研究において、次頁のような学習指導の工夫を行った。

- 音や音楽を聴き、聴き取ったり感じ取ったりしたことの可視化
- 音楽表現を工夫していくための視点の設定
- 思いや意図と音楽表現のつながりの視覚化

その結果、音や音楽を聴いて感じたり考えたりしたことを図や言葉、音楽等で表すことができるようになり、感じ取ったことと聴き取ったことを結び付けて友達に伝えることのできる子どもが増えてきた。また、聴き取った音楽を形づくっている要素を視点として工夫を伝え合ったり、音楽を形づくっている要素と感じ取った曲想やよさ等とを結び付けて自分の考えを伝え合ったりと、音楽的な見方・考え方を働かせながら、音楽表現を高めたり、音楽を味わって聴き深めたりする姿が見られた。

しかし、音楽的な見方・考え方を働かせられているものの、子どもたちが選択する音楽表現の工夫や、聴き取る音楽の特徴には偏りが見られ、音楽的な見方・考え方を十分に働かせているとはいえない。また、音楽表現を工夫したり鑑賞曲を味わって聴いたりする際には、音楽を形づくっている要素やその働きを基にしながら考えていく必要があるが、その音楽を形づくっている要素は以下のように複数あるため、子どもたちは慣れ親しんでいる要素を多用してしまったり、知っている要素だけ意識して聴いてしまったりするという課題がある。

【音楽を形づくっている要素】

- ア 音楽を特徴付けている要素：音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズなど
- イ 音楽の仕組み：反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係など

個の音楽経験によって生まれる音楽的な見方や考え方の違いを、授業中の音楽活動を通して共有することによって、新たな気づきを得ることができ、音楽を形づくっている要素やその働きをより広く捉えることができるようになる。様々な音楽を形づくっている要素やその働きで音や音楽をより深く捉えることができれば、音楽に対する自己のイメージがさらに膨らみ、学習で出会う音や音楽だけでなく、生活や社会の中の音や音楽との関わり方も豊かになっていくと考える。

そこで、本年次は、音楽科において育む資質・能力の育成に向け、「見方・考え方」を働かせた協働的な学びの面から授業改善を行う研究を進めていくこととした。

4 研究内容

（１）音楽科を学ぶ本質的意義と「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿

本校音楽科が目指す資質・能力の育成に向け、以下のように、音楽科を学ぶ本質的意義と問題解決的な学習の過程における「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿を捉えた。

① 音楽科を学ぶ本質的意義

一緒に音や音楽を聴いたり表現したりすることを通して感動体験を共有し、心を豊かにすること

自分にとって価値のある音や音楽に触れると心が動く、すなわち感動を体験することができる。また、音や音楽と一緒に表現したり聴いたりすることで、その空間にいる人や過去の人とも、音楽を介してつながることができる。この感動体験を共有することを積み重ねていくことで、相手（友達や演奏者、作曲者等）の思いを感じ取る心や美しいものに感動することのできる豊かな心が育っていく。

音楽科を友達と共に学ぶことで、自分の思いが音や音楽を通して相手に伝わる経験や、友達と音を

合わせて表現できたときの嬉しさや達成感を味わう経験、偶然生み出された音や音楽の面白さに気付く経験等、心が動く経験（感動体験）を積み重ねていくができる。その中で、自分の感情やイメージと、音楽を形づくっている要素が結び付く経験をすることで、自分の中での音楽の価値が高まっていき、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てていくことにつながる。そして、音楽科の学習で出会う音や音楽、それらを表現したり鑑賞したりした際の感動と、生活や社会の中の音や音楽とが結び付いたときに、音や音楽の知識や捉え方はさらに広がっていく。そして、自分の好みや感情に合わせて音や音楽を選択したり聴いたりする等、生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養うことにつながる。

② 「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿

本校音楽科では、以下のように、「『見方・考え方』を働かせて学ぶ姿」と「協働的に学ぶ姿」を捉えた。

【「見方・考え方」を働かせて学ぶ姿】

- ・聴き取った音楽を形づくっている要素と感じ取った曲想やよさ、面白さ等を結び付けながら、音や音楽を捉えている。
- ・音や音楽が生活や文化と結び付いていることに気付いている。

【協働的に学ぶ姿】

自分や友達の音や音楽を聴いて、感じ方の違いに気付き、思いや意図をもったり、思いや意図と聴き方を更新したりしている。

上記の子どもの姿を表現領域（図2）・鑑賞領域（図3）の問題解決的な学習の各過程に具体化し、位置付けた。

過程	表現領域（題材）の学習活動	「見方・考え方」を働かせて学ぶ姿	協働的に学ぶ姿
つかむ	聴いたり演奏したりして、聴き取ったり感じ取ったりしたことを伝え合う	音や音楽から感じ取った自分の感情やイメージと、聴き取った音楽を形づくっている要素とを結び付けている。	聴き取った音楽を形づくっている要素を伝え合い、題材でよりどころとなる音楽を形づくっている要素に気付いている。
追求する	1 音楽表現に対する思いや意図をもち、課題(めあて)を設定する 2 工夫して音楽表現をする ↓ 繰り返す ↑ 3 音楽表現に対する思いや意図を膨らませる 4 課題（めあて）の答えを出す 1～4を繰り返す	自他の表現した音や音楽から感じ取ったことと、聴き取った音楽を形づくっている要素を、思いや意図と関連させながら結び付けている。	友達と、思いや意図をもって音や音楽を表現し合い、そこから感じ取ったことを、言葉や音等で伝え、思いや意図を膨らませながら、音楽表現をよりよく工夫しようとしている。
まとめる	考えた音楽表現の工夫を生かして表現する。 -----※----- 学習の振り返りをする。	自他のイメージや感情と工夫した音楽を形づくっている要素を結び付けている。	お互いの音楽表現のよさや面白さを認め合い、自分にとっての音や音楽の価値を見いだしている。

図2 本校音楽科の表現領域の問題解決的な学習の各過程における、「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿

なお、本校では、たくさんの音楽に触れ、音や音楽の捉えを広げ、より豊かに音や音楽と関わるように、前頁の「」に、鑑賞領域を位置付けられるように題材を構成している。題材特有の「よりどころとなる音楽を形づくっている要素」を要として鑑賞領域を適宜組み合わせていく。鑑賞領域の一単位時間における学習の過程は以下のとおりである。

過程	鑑賞領域（単位時間）の学習活動	「見方・考え方」を働かせて学ぶ姿	協働的に学ぶ姿
導入	曲全体を聴いて、聴き取ったり感じ取ったりしたことを伝え合う	音や音楽から感じ取ったイメージや感情と、聴き取った音楽を形づくっている要素を結び付けている。	自他の聴き方の違いから、聴く際の観点を見付けている。
	本時の課題（めあて）をつかむ		
展開	曲を聴く ↓ 繰り返す ↑	自分や友達の感じ取ったイメージや感情と、聴き取った音楽を形づくっている要素を結び付けている。	友達と考えを伝え合う中で、新たな聴き方に気付いている。
	聴き取ったり感じ取ったりしたことを伝え合う		
終末	再度、曲全体を聴いて、聴き取ったことと感じ取ったことのつながりをまとめる		

図3 本校音楽科の鑑賞領域の問題解決的な学習の各過程における、「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿

（２）学習指導の工夫

聴き取ったことと感じ取ったことを結び付ける段階的な課題の設定（ア）

子どもたちが、音楽的な見方・考え方を働かせながら、協働的に学習していくためには、音や音楽を聴いて、子どもたち一人一人が曲想や音楽を形づくっている要素を捉えることが大切である。なぜなら、曲想や音楽を形づくっている要素を捉えることで、表現領域では音や音楽に対して思いや意図を、鑑賞領域では音や音楽から自分なりの考えをもつことができるからである。

題材の中で、曲から感じ取った曲想や音や音楽のよさや面白さ、美しさ等と、その要因である題材特有のよりどころとなる音楽を形づくっている要素を結び付ける機会をたくさん設定することで、音や音楽の捉えは広がり、音や音楽との関わりが豊かになっていく。

そこで、教師は、音楽表現を高めたり聴き方を深めたりしていく過程で、子どもたちが感じ取ったことと聴き取ったことを何度も結び付けながら、その結び付きを増やしたり強くしたりできるように、課題を段階的に設定していく。

音楽表現を高めたり、聴き方を深めたりしていく過程には、複数の道筋がある。学習発表会のように最終的な発表の場や扱う曲が明確な題材もあるが、多くは、音楽表現を高めながら新たな曲に出会っていく題材である。そのような題材においては、「つかむ」過程で、曲の概要をつかめていても、曲想については漠然とした捉えであったり、よりどころとなる音楽を形づくっている要素が全て明らかになっていないことが多い。どの題材においても同様に、子どもたちが感じ取ったことと聴き取ったことを結び付けられるように、①「よりどころとなる音楽を形づくっている要素に気付く」②「イメージを膨らませ、思いや意図を明確にする」③「音楽表現を高める／聴き方を深める」④「他の教材へ生かす（題材によっては位置付かない）」という段階に沿って課題を設定していくことが有効である。①は題材によって、「つかむ」過程に入る場合と「追求する」過程に入る場合がある。また、

題材で扱う教材の数や、追求する音楽を形づくっている要素が複数ある場合には、①～④を複数回繰り返す場合がある。

教師は、題材計画を考える際に、予想される子どもたちの意識から課題を事前に設定しておく。そして、その課題と子どもの実態を合わせて、本時のめあてとして子どもと一緒に設定していく。それぞれの段階における課題例は以下のとおりである。

段階	課題例
①よりどころとなる音楽を形づくっている要素に気付く	・曲の特徴となる音楽を形づくっている要素とは何だろうか。 ・音楽を形づくっている要素はどのように表れているのだろうか。
②イメージを膨らませ、思いや意図を明確にする	・曲や音からどんなイメージが思い浮かぶだろうか。 ・どのように演奏すると、思いが表現できるのだろうか。
③音楽表現を高める	・思いや意図と音楽を形づくっている要素との関係は何だろうか。 ・音楽を形づくっている要素を、どのように工夫するとよいのだろうか。 ・イメージに合う音楽表現の工夫は何だろうか。
③聴き方を深める	・作詞者（作曲者）がこの曲に込めた思いは何だろうか。 ・自分と友達の聴き方はどのように違うのだろうか。
④他の教材へ生かす	・既習の教材と新しい教材の共通点は何だろうか。 ・既習事項を新しい教材ではどのように生かせるだろうか。

具体例 4年 旋律の重なりを感じ取ろう（全8時間）

よりどころとなる音楽を形づくっている要素：音の重なり、音色

第2時 課題（教師が事前に設定：以下同様）「①旋律はどのように重なっているのだろうか」

第1時の鑑賞から、音の重なりを聴き取れた子どもの気付きを基に、本時のめあて「音の重なり方に気を付けて、『ファランドール』を聴こう」を設定。王の行進の旋律と馬のダンスの旋律を聴き取り、それぞれの旋律だけで演奏されたときの曲想と、旋律の重なるときの曲想を聴き比べる。また、リコーダー二重奏の『オーラリー』を聴いて旋律の重なりについて知る。

第3時 課題「②『オーラリー』の曲からどんなイメージが浮かぶだろうか」

前時に聴いた『オーラリー』から感じたことを伝え合い、音楽表現をよりよくするために、本時のめあて「『オーラリー』の曲のイメージを膨らませよう」を設定。『オーラリー』を聴いたり試しの演奏をしたりして、曲のイメージを共有し、膨らませていく。

第4時 課題「③イメージに合う音楽表現の工夫は何だろうか」

前時のイメージを表現するための一人一人の思いや意図を共有し、本時のめあて「『オーラリー』のイメージに合う旋律の重ね方や音色を工夫して演奏しよう」を設定。旋律の重ね方に気を付けたり、息の入れ方や強さを考えたりしながら演奏する。

第5時 課題「④『オーラリー』で旋律の重なりを手がかりにして考えた音楽表現の工夫を『もみじ』でも生かすにはどのように工夫したらよいだろうか」

『オーラリー』でイメージに合わせて音の重ね方や音色を工夫したことを振り返り、本時のめあて「音の重ね方や音色を工夫しながら『もみじ』を歌おう」を設定。もみじのイメージを思い浮かべながら、イメージに合う歌い方の工夫を、『オーラリー』での工夫や、もみじの旋律の重なりを手がかりにして考えていく。

（以下略）

音や音楽を比較する活動の設定（イ）

子どもたちが音楽的な見方・考え方を働かせながら協働的に学ぶためには、音や音楽を比較する活動を取り入れることが有効である。なぜなら、音楽を形づくっている要素やその働きを基に比較することで、思いや意図に合った音楽表現の工夫や、音や音楽の特徴を見いだす手がかりに気付くことができるからである。さらには、自分の考えと友達の考えの違いを知るきっかけにもなり、音楽表現の高まりや聴き方の深まりにもつながる。比較する活動において、比較する内容は大きく2つに分けられる。それぞれの比較対象は以下のとおりである。

また、上記の比較する活動を、学習指導の工夫（ア）と関連させて、段階に合ったタイミングで比較をすることが重要である。各段階における有効な比較対象とその効果は以下のとおりである。

比較内容	比較対象	
自他の演奏の比較	A	自分（たち）とクラスの友達の演奏
	B	自分（たち）と過去の自分（たち）の演奏
	C	自分たちとプロや上学年の演奏
曲同士の比較	D	同じ曲の中の異なる部分
	E	同じ曲の異なる楽器や編成での演奏
	F	異なる曲同士

比較のタイミング (段階)	有効な 比較対象	効果
①よりどころとなる音楽を形づくっている要素に気付く	D・E・F	・曲特有の音楽を形づくっている要素に気付く。 ・曲想の変化や音楽表現の工夫の違いに気付く。 ・楽器や奏法、形態による曲想の違いや音楽表現の工夫のよさに気付く。
②イメージを膨らませ、思いや意図を明確にする	B・C	・曲特有のイメージに気付く。 ・自分たちの音楽表現の工夫との違いに気付く。 ・音楽表現の目標となる音楽表現に気付く。
③音楽表現を高める	A・D・E	・イメージに合った音楽表現を見いだす。 ・音楽表現の工夫の違いに気付く。 ・自分や友達の音楽表現のよさに気付く。
③聴き方を深める	D・E・F	・その曲特有の音楽を形づくっている要素やその働きに気付く。
④他の教材へ生かす	B・F	・過去の自分（たち）が考えた音楽表現の工夫のよさに気付く。 ・現在の曲に生かすことができる、既習事項に気付く。

具体例 2年 「ようすをおもいうかべて」(2/5時間目)

本時のめあて：『卵の殻をつけたひなどりのバレエ』を様子を思い浮かべながら聴こう。

比較のタイミング：①よりどころとなる音楽を形づくっている要素に気付く

比較対象：F 異なる曲同士(『あのねのねずみは』と『卵の殻をつけたひなどりのバレエ』)

まず、登場人物の様子に合った声の音色に気を付けながら、前時に学習した『あのねのねずみは』を歌う。次に『卵の殻をつけたひなどりのバレエ』をひなどりの様子を思い浮かべながら鑑賞する。2曲を比較することで、『あのねのねずみは』よりも曲の速度が速いことを聴き取った子どもたちは、様子を思い浮かべる際に「音色」だけでなく「速度」がよりどころとなる音楽を形づくっている要素となることに気付くことができる。

5 実践例 5年「思いを表現に生かそう」

(1) 題材の構想

本校音楽科において目指す資質・能力の育成に向け、子どもたちは、5年「アンサンブルの楽しみ」において、曲想の変化を聴き取ったり、曲想の変化やイメージに合わせて楽器の組合せや奏法を変えたりしながら、音楽表現の工夫を考えてアンサンブルをしてきた。このような子どもたちが、本題材において、「見方・考え方」を働かせて協働的に学び、本題材の目標となる資質・能力を育むことができるよう、以下のように題材構想をした。

指導計画

目標	感謝の気持ちが伝わるように、曲想と音楽の縦と横との関係の関わりを生かして表現したり、曲全体を味わって聴いたりしている。			
評価規準	(①知・技) 曲想と音楽の縦と横との関係や音色、強弱等を理解し、歌詞の表す気持ちを表情豊かに歌ったり、音の重なる響きを生かして楽器を演奏したりする。 (②思・判・表) 曲想と声や音の重なり合う響きや歌詞の内容等との関わりを生かした演奏について思いや意図をもったり、音楽の縦と横との関係を意識しながら曲全体を味わって聴いたりする。 (③主体的態度) 今までに習ったことを生かして、思いが伝わるように友達と声や音を合わせて演奏したり、音楽を味わって聴いたりする学習に主体的に取り組んでいる。			
過程	時間	学習活動	「見方・考え方」を働かせている姿	協働的に学ぶ姿
つかむ	1	○『change!』を歌ったり、『「カルメン」第1幕への前奏曲』を聴いたりして、「感謝の気持ちを込めて表現しよう」という学習のめあてをつかむ。	『change!』や『カルメン第一幕への前奏曲』から感じ取った曲想と、聴き取った音楽の縦と横との関係や音色等を結び付けて曲を捉えている。	自他の感じ取った曲想と聴き取った音楽の縦と横との関係や音色等の違いに気付き、音楽の縦と横との関係を基にした思いや意図、課題を見付けている。
	1	○『「カルメン」第1幕への前奏曲』のそれぞれの旋律を演奏する。		
追求する	4	○『「カルメン」第1幕への前奏曲』の部分ごとに演奏する。	思いや意図に合わせて表現をする中で、自他の表現した音や音楽から感じ取った曲想(曲のイメージ)と、その曲想を生み出している音楽の縦と横との関係や音色、強弱等を聴き取って、自他の思いや意図と結び付けている。	曲のイメージに合う音楽表現を、パート内や別のパートの友達と相談したり、友達の演奏を聴いて、友達の音や演奏のよさを感じ取って自分の演奏に取り入れたりしている。
	1	○『「カルメン」第1幕への前奏曲』を全体を通して合奏する。		
	1	○『Change』を二部合唱する。		
まとめる	1	○『Change』と『「カルメン」第1幕への前奏曲』を発表する。	曲のイメージや感謝の気持ちと、音楽の縦と横との関係を基にした工夫を結び付けている。	お互いの演奏のよさや面白さを認め、伝え合っている。

図4 5年「思いを表現に生かそう」における「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ姿

本題材では、鑑賞領域を1・2時間目の「つかむ」過程に設定した。

なお、本題材において、子どもが音楽的な見方・考え方を働かせて協働的に学ぶために、学習指導の工夫を以下のように設定した。

	段階的な課題の設定（ア）	音楽表現を比較する活動の設定（イ）
①第1時 ～第2時	「音楽の縦と横との関係とは何だろうか」	D：同じ曲の別の部分
②第2時 ～第3時	「曲から思い浮かぶイメージとは何だろうか」	
③第3時 ～第7時	「音楽の縦と横との関係を手がかりに、イメージに合った演奏をするためにはどのように工夫したらよいのだろうか」	A：自分たちと友達の演奏 D：同じ曲の別の部分
④第8時	「合奏での学習（音楽の縦と横との関係）を生かして、合唱をよりよくするにはどうしたらよいだろうか。」	F：異なる曲同士 A：自分たちと友達の演奏

（2）学びの実際 ※Kは抽出児，Cはその他の子ども，Tは教師，~~~~は音楽的な見方・考え方を働かせている姿

①「つかむ」の過程（第1時～第2時）

第1時は、『change!』を歌ったり、『「カルメン」第一幕への前奏曲』を聴いたりして、学習発表会に向けて、曲に込める思いを一人一人が考えた。その際のKの記述は以下のとおりである。

『change!』は、明るい曲で、歌っていて元気になれる。『「カルメン」第一幕への前奏曲』は、どんどん曲が変わっていく様子が面白い。全体的に豪華で派手な感じ。学習発表会では、聴く人に感謝の気持ちや、こんなすごい曲も演奏できるようになったことを伝えたい。

Kの記述からは、『change!』からは明るく前向きな曲想を感じ取り、『「カルメン」第一幕への前奏曲』からは華やかな曲想を感じ取って、それを表現することで自分たちの成長を伝えたいという思いや意図をもったことがうかがえる。

その後、子どもたち同士で話し合い、「保護者への感謝の気持ちを伝えたい。」「音楽を通して、様々な表現ができるようになったことを伝えたい。」という思いを共有した。そこで、「感謝の気持ちを込めて表現しよう」という学習のめあてをつかんだ。

Kの第1時の振り返りには、「ただ明るく元気に歌うだけではなく、身も心も成長したことを伝えるために力強さも出せるとよいと思った。曲が変わるところのメリハリをつけると、すごい合奏の感じが出ると思ったので、それに気を付けて合奏していきたい。」という記述があった。友達の意見を聴く中で、明るい音色だけではなく力強く歌うことや、静かなところは落ち着いた音色で演奏するとよいことに気付いた。

第2時の前半は、『「カルメン」第一幕への前奏曲』を改めて聴き、複数の旋律が重なり合っていることを確かめた。そこで教師は、演奏を追求するための手がかりとして「音楽の縦と横との関係」を提示した。子どもたちは、既習の旋律の重なり合いと音楽の縦と横との関係について、漠然と捉えられていたため、さらに曲と音楽の縦と横との関係が明確にできるように、「音楽の縦と横との関係を、それぞれの旋律を演奏しながら考えよう」という本時のめあてを設定した。（教師が事前に設定した課題「音楽の縦と横との関係とは何だろうか」）そして、試しの演奏をしながら演奏箇所による

音の重なり方を比較し、「同じタイミングで別の旋律を演奏しているパートがある。」という気付きから、複数の旋律が重なり合っているといった縦の関係を確かめたり、「楽譜が虹のように重なったまま曲が進んでいる。」という気付きから、旋律が重なり合いながら曲が流れていくといった横の関係を確かめたりした。音楽の縦と横との関係が生み出す、曲の面白さや曲想の変化に興味をもった子どもたちは、音楽の縦と横との関係をもとに合奏の工夫をしていきたいという思いや意図をもった。

以上のように、曲想と音楽を形づくっている要素を結び付けながら考えている姿は、音楽的な見方・考え方を働かせて学ぶ姿であり、音楽の縦と横との関係に目を向け、友達のを考えを聴きながら、思いや意図をもった姿は協働的に学ぶ姿といえる。

②「追求する」の過程（第2時～第8時）

第2時の後半は、演奏したり再度鑑賞したりする中で、曲のイメージを膨らませていった。（課題「曲から思い浮かぶイメージとは何だろうか」）

第3時からは、第2時に膨らませた曲のイメージと、それを表すための工夫や、子どもの思いや意図を共有する中で、「それぞれの場面に合うイメージを、音楽の縦と横との関係を手がかりにして表現の工夫を考えて演奏しよう」という本時のめあてを設定した。（課題「音楽の縦と横との関係を手がかりに、イメージに合った演奏をするためにはどのように工夫したらよいのだろうか」）その後、第一主題（練習番号☆・A）以下練習番号は□で表記）の合奏を行った。

子どもたちは、第一主題ににぎやかで楽しいというイメージをもっていた。最初の合奏をして、音色がイメージに合わないと感じたKや子どもたちは、まず、ピアノとテナーパートの奏法に着目した。ピアノを担当しているKは音を伸ばして演奏していたが、短く切った方がイメージに合うのではないかという友達のアドバイスを受け、短く切って演奏をした。さらに学級全体で音を伸ばした演奏と短く切った演奏を比較した子どもたちは、短く切った演奏の方が、元気で楽しい感じの音色になることを実感し、イメージに合っていることに気付いた。同じように、主旋律も比較演奏をする中で、跳ねるように演奏すると、にぎやかで華やかな音色が表現できることに気付く、自分たちのパートの役割と奏法を確認しながら合奏をした。ピアノやテナーパートで考えた音色や奏法の工夫を、主旋律の演奏を工夫する際に用いている姿は、音楽の縦と横との関係に気付き生かしている姿であり、音楽的な見方・考え方を働かせながら、友達と協働的に学ぶ姿といえる。

第4時は第二主題（B・C）の合奏を行った。子どもたちは曲想について、第一主題とは雰囲気が変わり、静かな感じがするが、後半では華やかな感じに戻るための準備をしているというイメージをもった。ピアノを担当しているKは、同じくピアノを担当している友達と共に、演奏しながら奏法を考えた。そして、最初の部分は長く（なめらかに）演奏することでイメージに合う音色になるのではないかと考えた。また、音楽の縦と横との関係を意識し、他のパートについても考えていたKは、全体の音が小さくなっていることや打楽器パートが演奏していないことから、テナーパートの重要性に気付き、テナーパートの音の重要性や、なめらかに演奏することのよ



図5 Kのパートで考えた工夫をまとめたパート譜



図6 テナーパートに重要性を伝えるK

さを伝えていた（図6）。その後の全体共有の場でのやりとりは以下のとおりである。

K：☆やAと比べて、Bはなめらかに演奏した方が（音色が合っていて）いいと思います。

C1：でも全部がなめらかだと重い感じがするから、‘ミラー’の部分はなめらかに演奏して、
‘ミッレッ’の部分はスタッカートで演奏するとよいと思います。

＜全部がなめらかな演奏と、スタッカートを入れた比較演奏＞

K：自分たちのパート（の役割的に）は（なめらかとスタッカートで）変えずに、このまま全
部なめらかな方が（曲の雰囲気に合っていて）いいな。（つぶやき）

C2：なめらかの方がいいと思いました。この後、僕たちのパートが「ダダダ、ダダダ」と勢い
よく入るから、なめらかな部分とのメリハリになると思います。

C3：でも全部がなめらかだとつまらないと思います。ピアノで言うと、ペダルを踏みっぱなしみ
たいな…。気分転換が必要だと思います。

比較演奏をしたが、子どもたちはどちらのよさも感じていたため、再びパートごとに試行する時間を設定した。Kは、自分たちの楽器だけで、はずむような音色を表現することに限界を感じ、打楽器パートに声をかけ、一緒に演奏してはずむような音色を表せないか考えた（図7）。ばちを打面に留めるのではなく、すぐに離してみたり、勢いを付けたりする等の奏法を提案し、はずむような音色を表すためのよりよい奏法の工夫を打楽器パートの子どもと一緒に考えていた。その後、パートごとに工夫したことを共有し、聴き役を設定して、なめらかな演奏とスタッカートを入れた演奏を続け旋律とともに再度比較した。そして、聴き役のアドバイスも受け、スタッカートを入れた演奏をして、協力してはずむような音色で演奏することにまとまっていた。



図7 小太鼓と一緒にスタッカート
の奏法を考えるK

表したいイメージに向かい、第一主題の曲想と奏法とを比較しながら第二主題の奏法を考えたり、同じ部分を比較しながら自分の奏法を考えたりしている姿は、音楽的な見方・考え方を働かせて学ぶ姿である。また、Kは、友達が音楽的な見方・考え方を働かせながら考えた意見を基に、自分のパートの奏法を再考している（図8）。友達の言葉や音を基にして、自分の思いや意図、音楽表現の工夫を更新していく姿は、協働的に学びを深める姿である。



図8 ピアノパートの
奏法を再考するK

第5時からは、展開部（D～I）の合奏を行った。子どもたちは転調に戸惑い、正しいリズムや音で演奏することが難しい様子が見られた。音楽の縦と横との関係を意識しながら、パート内で教え合ったり、同じ旋律のパート同士で演奏したりする中で、同じ旋律のまとまりが2回繰り返されることや、2回目の方が派手な感じになること、1回目と2回目で全体の中で担当する役割が代わること等に気付いた。

第6時では、前時に気付いたことをもとに、イメージに合う音楽表現の工夫をしていった。展開部の最初は、ピアノ・鉄琴・木琴パートのみによる伴奏から始まる。子どもたちは、この伴奏から闘牛士の歩く様子（堂々とした感じ）や、その後に始まる旋律から闘牛士のイメージ（勇敢、力強い、格好いい、堂々としている等）を捉えた。そして、そのイメージに合った合奏にするためにはどうしたらよいか、パート内や近くのパート同士で演奏をしながら考えた。子どもたちが捉えたそれぞれのイ

メージと、その後のやり取りは以下のとおりである。

C 4 : 堂々と歩く感じって、ピアノだとどうすると表せるかな。

K : 大きな音で演奏するといいいのではないかな。演奏してみよう。(演奏する)

K : 大きすぎるときれいな音じゃなくて、闘牛士の感じに合わないね。格好よく歩くイメージで、しっかりした音を出せるといいよね。

C 4 : ピアノで表すだけではなくて、木琴と鉄琴にも伝えて一緒に演奏してみよう。

その後、Kは全体共有の中で、闘牛士の堂々とした感じを表すためには、鉄琴や木琴もはっきりした音色で演奏するとよいことを伝えた。はっきりした音や力強い音等、比較演奏をしたり、実際に友達に演奏に合わせて歩いてもらったりしながら、イメージに合う音色や奏法を考えた。自分たちのもったイメージに合わせ、音色や強弱等を工夫しようとしている姿は、音楽的な見方・考え方を働かせて学ぶ姿であり、パートごとにイメージに合う奏法を相談する姿や、共有の中で、友達の意見や音を聴きながら、自分の演奏を確かめ工夫している姿は、協働的に学ぶ姿といえる。

第7時では、『「カルメン」第一幕への前奏曲』を通して合奏をした。Kの振り返りには、「自分のパートの役割を考えて演奏した。それぞれのパートに合った演奏の仕方があって、役割を意識して演奏した方がいい合奏になったと思う。ぼくは支えるパートだから、曲想に合った音色で大きく演奏することができた。」ということが書かれており、音楽の縦と横との関係を手がかりにして、イメージに合う合奏ができたことを実感していたことがうかがえる。それぞれの旋律の重なりを意識して演奏したり、音色や強弱等を工夫したりしたことが、イメージに合う演奏につながったことを実感し、課題「音楽の縦と横との関係を手がかりに、イメージに合った演奏をするためにはどのように工夫したらよいのだろうか」の答えとして振り返った。

第8時では、『change!』でも、1つの旋律ではなく、ソプラノパートとアルトパート、さらに伴奏とが重なり合っているという、音楽の縦と横との関係があることに気付いた子どもたちは、本時のめあて「音楽の縦と横との関係を手がかりにして、イメージに合う歌い方を工夫しよう」を設定した。

(課題「合奏での学習を生かして、合唱をよりよくするにはどうしたらよいか」) 全員で同じ旋律を斉唱しているときと、重なり合って合唱しているときの歌い方や音色の違いを意識したり、主旋律と副旋律の役割を理解して歌い方や音色を工夫したり、それぞれの旋律の重なりの違いを意識して歌った。Kは、合奏をする前は、友達の旋律につられないように歌おうとしていたが、合奏後は、友達の旋律を聴き、きれいに重なる方法を試行錯誤していた。これは、音楽の縦と横との関係という音楽を形づくっている要素を新たに知り、合奏を通して考えてきた成果といえる。

③「まとめる」の過程(第9時)

第9時は、学習発表会で、保護者への感謝の気持ちや自分たちの成長の様子を伝えたいという思いを込めながら、工夫してきたことを生かして合唱と合奏を行った。右の図はKの書いた合奏についてのまとめの文章である。

Kは、音楽の縦と横との関係を基に、自分のパートと友達のパートを聴き合いながら合奏をつくりあげることができていた。

また、本番で使うオルガンの音色を曲のイメージに合わせて、第一主題ではチューバ、第二主題ではピアノというように音色を変えたことで、思いや意図に合った

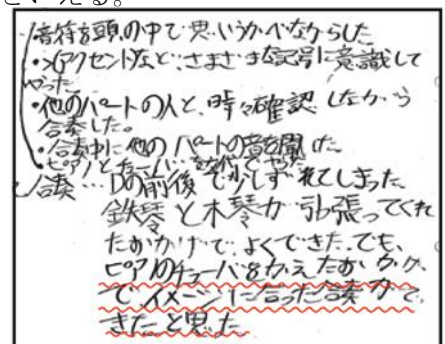


図9 Kのまとめの文章

表現ができたことを実感していた。

思いや意図をもち、自分の思いや意図に合う音楽表現の工夫を、音楽の縦と横との関係を手がかりに考えたり、友達の音楽表現のよさを認めながら、自分の音楽表現に生かしている姿は、音楽的な見方・考え方を働かせながら協働的に学ぶ姿といえる。

題材を通して、音楽の縦と横との関係を手がかりにして追求したことで、合唱や合奏の音楽表現が高まったことを自覚し、一つの教材で学習したことを他の教材でも生かせることに気付いていた。また、自分たちだけでは工夫できなかった演奏が、友達と合わせたことで演奏できた喜びも感じており、心を動かし、感動する体験を味わえたといえる。

6 成果と課題

本校音楽科では、「聴き取ったことと感じ取ったことを結び付け、音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成に向け、「見方・考え方」を働かせて協働的に学ぶ子どもの姿に焦点を当てて研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

○段階的な課題の設定を行い、音楽表現を比較する活動を取り入れた結果以下のような姿が見られた。

- ・偏りなく様々な音楽を形づくっている要素に気付き、自身のもった思いや意図、感じたことと関わらせながら音楽表現を高めたり、聴き方を深めたりする姿。
- ・音楽表現を比較しながら、思いや意図に合った音楽表現の工夫を見いだす手がかりを得て、音楽表現の工夫を考え、演奏に生かす姿。
- ・友達に考えたことを音や言葉で伝えたり、友達の音から音楽表現のよさを感じ取ったりしながら、音楽を形づくっている要素やその働きをより広く捉え、表現や鑑賞に生かす姿。

以上の姿は、友達と一緒に音楽を表現したり鑑賞したりする中で、音や音楽、音楽を形づくっている要素やその働きの捉えを広げていく姿であり、音楽的な見方・考え方を働かせながら協働的に学ぶ姿である。また、その感じ取ったことと聴き取ったことを結び付けながら、思いや意図をもって音楽表現をしたり、味わって聴いたりすることができるようになった姿といえる。このことから、「聴き取ったことと感じ取ったことを結び付け、音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成につながったと考えられる。

○比較をすることの有効性は感じているものの、子どもが比較をするタイミングや方法をつかみきれず、比較をすることが音楽表現を高めたり聴き方を深めたりするための手段として子どもたちの選択肢になっていない。タイミングや方法を可視化したり、音楽の授業の学び方として段階的な課題と関連させてパターンを示したりする等、子どもたちが音楽表現をよりよくしたり、聴き方を深めたりするために、子どもたちが比較することを選択できる手立てを、発達段階に合わせて考える必要がある。

【参考文献】

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』，平成30年2月，東洋館出版。
- ・宮崎新悟・志民一成【編著】『小学校新学習指導要領の展開 音楽編』，明治図書出版株式会社，2017年
- ・梅野知子「小学生のためのソングブック『明日へつなぐもの』」，音楽之友社，2016年
- ・ビゼー作曲，山下国俊編曲『「カルメン」第一幕への前奏曲』，ミュージックエイト（ドレミファ器楽）